



## 一 目玉島

---

「目玉島に行きたいんですけど……」

藤島は港で車を誘導している船員に尋ねた。

「目玉島はあの島だ。手前が左目島。向こう側が右目島だ」

船員の目の先には、丸い島が二つ浮かんでいた。藤島は目玉島の事は調べていたけれど、あえて、地元の人に尋ねてみた。

「どうして、目玉島と呼ぶんですか？」

「ほら。目玉みたいな丸い島が仲良く並んでいるだろう。だから、目玉島と呼んでいるんだ」

「そうですか……」

「あんちゃん。あの島に行きたいんだったら、あそこで切符を買いな」

六十歳に近い白髪交じりの船員が指差した先に、待合所兼切符売り場があった。

「ありがとうございます」

藤島は頭を下げ、ショルダーバッグを肩に掛け直し、切符売り場に向かって歩きだした。

藤島は東京の旅行専門の出版社の編集者だった。ある日、藤島が何か面白いネタを探して、インターネット上で検索していたら、目玉島の記事がたまたま掲載されていた。目玉という言葉に藤島は魅かれた。

それから、様々な書物やインターネットを駆使して、目玉島の事を詳細に調べた。瀬戸内海に浮かぶ二つの小島。どちらの島も人口は二百人程度。若い人は少なく、高齢化が進み、島の保育所や小学校、中学校は休校中。若い夫婦や小さな子どもはおらず、再開される見込みがないため、廃校と同じだ。

日本国中、山村に行けば、この島と全く同じ状況だ。わざわざ、東京から取材に行く必要性はない。だけど、目玉島という名前に魅かれた。正式には、東にあるのが右目島、西にあるのが左目島だ。二つ合わせて、目玉島と呼んでいる。

藤島は編集長から新しい企画を提案するよう指示されていた。そこで、目玉島旅行記を提案した。

「目玉島か。確かに名前は面白いな。目玉だけに視点がいい。まあ、冗談だけだな。ただ、名前がユニークなだけではなあ」

「この島は、最近、全国各地で開催されている地域限定の芸術祭が開催されています。過疎と芸術祭をテーマにすれば、面白い記事が書けると思います。それに、最近、都会から若い家族が移住して、小学校が再開したと聞いています」  
編集長に迫る藤島。

「現代芸術で過疎地域が振興できるかどうか、な。まあ、やってみるか。だが、半分は社費で、半分は自腹だ。夏休みも兼ねて行って来い」

「ええ、費用は会社持ちじゃないんですか？」

「当たり前だ。今、会社の経営は苦しいからな。ただし、記事が面白ければ、全額負担してもいいぞ」

「わかりました。領収書は忘れずに全部取っておきます」

藤島が勤めている業界は、一見、派手に見えるが、内実は火の車だ。インターネット等で、本や雑誌が売れなくなってきた。古本や中古本などを全国展開しているリサイクルショップのあおりも受けている。

また、インターネットが普及したので、全国民が今日から作家となり、二十四時間、三百六十五日、にわか作りの作品が、インターネット上をサーフィンし、読者の下へ、新聞配達ならぬ、小説配達されている。

ただし、九割、いや九十九、九パーセントが、自己満足を露出させた作品で、他人に読まれ、共感されることなく深

い海の底に沈み、二度と浮かび上がってくることはない。人の心に留まり、海から空に登っていく龍のような作品は稀少だ。

「藤島、だけど、大丈夫か？ひとりで行けるのか？」

編集長が心配してくれる。子どもじゃあるまいし。それに、ここは日本の国だ。言葉が通じれば、どこだって行ける。それよりも心配なのは、本当に、この目玉島が記事になるかどうかである。しかも、旅費の半分は自己負担だ。

日本中に、島はいくつあるのか。無人島を含めれば約七千だそうだ。その島の中で、目玉島に関心を持った。強く魅かれたのである。よくもまあ、自分は気がついたものだ。編集者としての直感であり、いわゆる鼻が効いたのだ。

自画自賛じゃないけれど、自分に感心すると同時に、少し誇らしい気持ちになった。

さあ、早速、目玉島に行って、島の人に話を聞いて、いいネタを見つけだし、いい作品を書こう。編集長の言い通り、記事が面白ければ、雑誌に記事が掲載されるだけでなく、日本全国島巡り紀行という企画で、連載が始まるかもしれない。また、連載がまとまれば、本の出版だって可能だ。

「さあ、やるぞ」

藤島の編集者魂（そんなものがあるかどうかは知らないけれど）が静かに燃えた。

藤島は甲板から海を眺めていた。藤島が乗船したのは、車が二十台も乗れば満杯となる小さなフェリーだ。長椅子はあったけれど、折角の船旅だから椅子に座っているのがもったいなかったのと、椅子に座ると眠ってしまいそうだったので、デッキに立ったまま海を眺めた。

島が多く、波は穏やかで、タンカーからフェリー、漁船、ヨットまで、数多くの船が航行している。いや、あまりにも、海が穏やかなので、島々に寄り道小道しながら、海を散歩しているように思える。

昨日の夜の十時頃、東京を出発した。夜行バスは、今朝の七時過ぎに、T市のJRや電車の駅、港など、公共交通機関の結節点であるターミナルに到着した。

T市は港から、海から発展した街で、藤島が夜行バスから降りると、風に吹かれてか、潮の匂いが鼻先に漂ってきた。匂いに誘われて、藤島は街を歩いた。普段の生活では、潮の匂いに包まれることはなかった。毎日、満員電車の乗客の汗と香水が破壊的に混合された臭いを強制的にかがされてしていた。

また、仕事場に行けば、パソコンの前に座ったきり、自分の体臭がしみついたデスクにバリヤーを張って一日中過ごした。旅行雑誌の編集者なのに、実際は、朝から晩まで椅子に座ったきりであった。そんな毎日の中で、ようやく手に入れた取材と言う名の骨休みであった。

港からの左目島や右目島の目玉島は、ぱっと見れば泳いでいけそうな距離だ。ただし、実際は、フェリーが小さく、スピードも出ないせいもあるが、左目島までは二十分、右目島は四十分もかかる。それでも、わずかの時間でも、日常生活を離れ、非日常の海外旅行(?)が楽しめるのならば、値段は安いものだ。

この二つの島は、昔は千人以上も住んでいたが、今は、二百人程度に減少している。両島には、保育所や小学校があったが、現在は、休園・休校中だ。住民の平均年齢は六十歳を超えている。ただし、最近の情報では、芸術祭の効果なのか、若い夫婦が島に移住し、小学校が再開したらしい。だが、ほとんどの若者や若夫婦たちは、対岸の街や大阪や東京に仕事を求めて島を出た。それに伴って、子どもたちも島を離れた。街まで、わずか二十分、四十分の距離だが、船の便数が少なく、最終便の時間が早いため、島からの通勤は無理であった。残業でもすれば、市内で宿泊しなければならない。自分の家があっても、かえって、お金がかかるのだ。

藤島は島に関する情報をインターネットなどで調べた。だが、実際に、こうして船に乗っていると、情報と現実はなんだか少し違うような気がする。

出版社に勤め、編集の仕事に携わっている者が言うのも変だけど、ほとんどの人が情報に踊らされているのではない。情報は生活の一部でしかない。それなのに、過疎という言葉で、その島が定義づけされてしまう。目玉島でも、人が生活しているのだ。もちろん、都会の〇〇町の△△アパートでも人は住んでいる。人が住むと言うことは、一体どうということなのだろうと考えさせられる。



## 二 目玉じいさん

フェリーが左目島の港に着いた。藤島は、まずは、遠い右目島に行き、取材をしようと考えていた。まだ、二十分ある。船旅を楽しむことができる。

旅行者らしき人が何人か降りた。再び、乗ってくるのは、地元の人。この両島では、昔、瀬戸の花嫁ではないけれど、右目島から左目島、左目島から右目島に結婚するために、女性が移動した。

両目島とも親戚だ。理由は、島以外に嫁ぎ先が少ないこと、島の中だけでは近親すぎることに、両島が漁業で生計を立てているため、お互いの島民同士の仲が良くないと、生活できないからだ。ある意味、政略結婚の要素もあるのだ。もちろん、こんな話はインターネットには掲載されていない。フェリーの中で聞いた話だ。

藤島を乗せたフェリーは、それから二十分かけて右目島の港に着いた。港には、蝶の羽がそっと休んだような現代芸術の建物があつた。船の待合所だ。待合所を作って欲しいという島民の要望を受け、芸術祭の参加作家に依頼し、T市が建てたものらしい。現在、その作家は世界でも有名になっているとのことだ。

だが、藤島には何がいいのかさっぱりわからない。この島には、待合所の作品以外にも、芸術祭に参加して、取り壊されずに、そのまま残っている作品が数点あるらしい。芸術作品兼待合所兼観光案内所の中に置いてあるチラシで確認した。

展覧会などで風景画などを鑑賞することはあるが、現代芸術になると、さっぱりわからないため、展示作品は見ずに通り過ぎてしまうことが多い。同僚の女性編集者からは、わからなくていいのよ、面白いと感じればいいのに、頭でわかろうとするから面白くなるのよ、と笑いながら諭されたことを思い出した。

藤島としては、今回の取材は、新しいネタ探しとともに、現代芸術にふれて、かちんこちんに固まった頭が少しでも柔らかくなればと期待している。だが、芸術作品の待合所を見た瞬間、その道は遠いと感じざるを得なかった。

現代芸術の鑑賞は後回しにして、右目島や左目島の両島をくまなく歩き、島の人々に歴史やお祭り、風習など、島の事を尋ね、写真を撮影するなど、取材に努めた。

それなりに資料が集まった時、右目島のある人から、目玉じいさんの話を聞いた。目玉じいさんは、この両島の一番の古者で、島の事なら何でも知っていると言った。どうして、目玉じいさんと呼ぶんですか、と尋ねたら、会ってみればわかると言われた。

藤島は、「目玉じいさん」というフレーズに魅かれた。会ってみたい。

目玉じいさんは左目島に住んでいた。それも、島の一番高い場所に洞窟があり、そこに住んでいるとのことだ。原始時代じゃあるまいし、と藤島は思った。

その洞窟は、昔、海賊の住処だったとの伝説があるらしい。だが、眉唾ものだ。本当は、石を採掘した結果、穴が、洞窟ができたのだろう。

藤島は右目島から左目島に渡り、麓から山の頂上にある洞窟目がけて歩いた。道は狭く、軽自動車が一台通れるかどうかぐらいの幅だった。とてもじゃないけれど、車二台は交わせない。だけど道幅は、それで十分だった。この島を車で走る人はほとんどいないからだ。

藤島は今は花びらが散り、葉だけとなった桜並木の坂道を登っていく。最近、運動をしていないせいか、わずかの勾配の坂道でも息が上がる。途中で立ち止り、今来た道を振り返る。

段々畑や道沿いの家、先ほど船から降りた港が見え、その向こう側に海が広がっていた。海の先の対岸には、この島を訪れるために乗船した港や東京からの夜行バスが着いたターミナル、T市のシンボルである高層タワーなどがくっきりと見えた。

その奥には、はっきりとした形はわからないけれど、ぼやけた輪郭の山並みが雲と同様に漂っている。

藤島は、再び、歩を進めた。途中で、舗装道路のカーブから山道に入り、樹木に覆われた石、岩の坂道を登りきると、大きくうねったカーブの舗装道路に出た。そこが、舗装道路のゴール地点だった。車ならば終着点であった。車で乗

ってきた人も、ここから先は歩くしかない。

更に、コンクリートの階段を登った。頂上の一步手前の広場に、茶店があった。喉の渴きを覚えた藤島は、お茶と団子を注文した。団子はこの地が海賊、すなわち鬼の住処で、その鬼を退治した桃太郎の伝説にふさわしく、きびだんごだった。

お茶とだんごで一息付き、店のおばあさんに別れを告げた。その時、目玉じいさんのことを尋ねた。

茶店のおばあさんは、「目玉じいさんなら、この先、ちょっと行ったところの、洞窟にいますよ」

「洞窟に住んでいると噂で聞いたのですが、本当に住んでいるんですか？」

「まさか。原始時代じゃあるまいし。観光客のために、洞窟の受付をしているんですよ。洞窟が閉館したら、麓の家に帰っていますよ」

「目が見えないのにですか？」

「目は見えますよ。ちゃんと歩いていますよ。それでも、もうろくしたから、目は薄くなっていると思いますよ。耳も少し遠いんじゃない。もちろん、あたしも同じだけど。はははは」

「いや。目玉じいさんは、目が見えないと、目玉がないと聞いたんですが・・・」

「ええ。本人は、昔、両方の目玉が飛び出して、日本一周や世界一周したなんてほら話をしていますけどね。でも、あのじいさん、この島から一步も出たことはありませんよ。あたしは、目玉じいさんの同級生だから、間違いありませんよ。確かに、昔、目を患ったことはあるみたいだけど。でも、それも、本人が言っていることだから、どこまで信用できるのかわからないですけどね」

藤島は茶店のおばあさんに別れを告げて、目玉じいさんのいる洞窟に向かった。洞窟は茶屋から直ぐ側だった。小さな建物があり、その前方に展望台のテラスがあり、暗く口を開けた洞窟があった。

「こんにちは」

藤島は大きな声をあげた。先ほど、茶店のおばあさんから、耳が遠いかも知れないと聞いていたからだ。

その声を聞いて、一人のじいさんがにこにこしながら小屋から出てきた。

「いらっしやい。入場券は自動販売機で購入してください」

「いいえ。洞窟に入りに来たんじゃないんです。失礼ですけど、おじさんは目玉じいさんですか？」

「あっはっはっは。目玉じいさんか？確かに、島の人は、わしがのことを目玉じいさんと呼んでいるらしい。直接、目玉じいさんと呼ばれたのは、あんたが初めてじゃ」

「そうですか。大変失礼しました」

藤島はばつが悪そうに、頭を垂れた。

「それで、あんたはわしに何の用じゃ」

「ええ。右目島や左目島のことを聞きたいんです。それに、今、先ほど、茶店の人におじいさんの目玉が日本一周や世界一周をしたこともお聞きしたいんです」

藤島は自分の職業を明かして、目玉じいさんの話を取材したい旨を説明した。目玉じいさんは、それこそ、目玉を白黒させながら驚いていたが、「立ったまま話をするのも何だから、それじゃあ、あちらへ」と、展望台のテラスへ歩いた。

テラスからは島や海が一望できた。そこに立っていると、「進め、左目島！」と、この島（船）を操縦しているかのような気分になる。

「まあ、座りなさい」

後から、目玉じいさんがテラスにある長椅子に腰かけた。藤島はテーブル越しに向かい合って座った。

目玉じいさんは、藤島の方は見ようとせず、目を展望台から遠い海の彼方に向け、おもむろにしゃべり始めた。

藤島は慌てて録音機のスイッチを押し、メモを取り始めた。話は二時間以上にも及んだ。その間、霧島は質問するこ

となく、目玉じいさんの話を聞き続けた。目玉じいさんの話が終わると、礼を言って、島を後にした。

会社に戻ると、目玉じいさんの話を全て文章に書き起こした。話を聞いている最中は、メモを取ることに夢中であったので、質問をすることができなかったが、再度、会話を書き起こすと、一部分、聞き取れない部分やよくわからない部分もあった。また、時代背景が違っているような箇所もあった。

藤島は疑問点をはっきりさせようと、再度、目玉じいさんに会うために島を訪れた。だが、目玉じいさんは、「おい。待て」と、何かを追いかけてようとして、谷底に落ち、亡くなったとのことだった。以下の話は、藤島が目玉じいさんの話をまとめたものである。

### 三 少年

今から、五十年前、瀬戸内海のある小島に、少年（目玉じいさん）が住んでいた。その島は周囲約八キロしかなく、少年の足でも、約二時間もあればぐりと一周できた。島には、千人以上の人が住んでいたが、今では、二百人程度しかいない。それも、七十歳を超えた年寄りばかりだ。保育所は閉鎖され、小学校は休校した。ただし、最近、右目島の方では、芸術祭の開催の効果で、若い人が移住し、小学校は再開したらしいが、左目島では、相変わらず、休校のままだ。

ただし、目玉じいさんが少年の頃は、島も活気があり、子どもたちも多かった。少年は小学六年生で、来春には中学生になる。卒業式は後一週間に迫っていた。

島には中学校がなく、少年を始め、島の子どもたちは中学生になれば、対岸の街の中学校に船で通学した。中には、親戚の家に下宿する者もいた。シケや濃霧で、欠航することが度々あったからだ。だけど、少年は、この島が好きだから、自宅から船に乗って通学したいと思っていた。

少年は島での生活が楽しかった。朝、目覚めると、東の空に昇る赤い太陽を見て、太陽が昇った後からは何が生まれているんだろうかと想像した。それから、朝食を食べ、学校に向かう。授業中でも、教室の窓から外を見て、南の空に高く昇りつつある金色に輝く太陽を見ながら、南の彼方には、どんな世界が広がっているんだろうかと夢想した。

授業が終わり、学校帰りには、西の空を眺め、島々の間に沈むオレンジ色の夕日を見て、海の底にはどんな宝物が隠されているのだろうかと、思いを馳せた。

夜になると、太陽とバトンタッチして昇って来る月や北極星、北斗七星を見つめながら、宇宙のどこかには、地球上の人間や動物、植物と同じような生物がいるはずだと確信していた。

そして、「もう寝なさい」と両親からの声で、ふとんの中に滑り込み、今日一日、思いを巡らせた世界を、もう一度、夢の中では、追体験するのだった。

そんな小学生の生活もあとわずかとなったある日のことだった。少年は「行ってきます」のあいさつとともに、家を出ようとしたら、玄関の階段で足を滑らした。その拍子に目玉が二個飛び出ようとした。

少年は慌てて、まぶたを抑えたが、目玉は目の中にはもうなかった。少年の家は島の高台にあった。島は平地が少ないため、島の人々は傾斜地に家を建てて住んでいた。だんだん畑ならぬ、だんだん家だ。そのため、玄関を一步出ると、坂道になっている。

少年の目から飛び出た目玉のうち、右目は右方向に転がり、左目は左方向に転が落ちていく。少年は、目が見えない中、右手を右方向に、左手は左方向に伸ばし、目玉を捕まえようとした。しかし、両方の目玉とも、少年の手から逃れるように、坂道を転がり、海へと落ちた。目が見えなくなった少年は、ただ、立ちつくすだけであった。

「慌てても仕方がない。目玉はいつか戻ってくるだろう」

目玉を落とした少年は、逆に目玉が自分を見つけやすいように、今までの記憶を頼りに、坂道を這うようにして、島の一番高い岩山に登って、てっぺんで両足を投げ出して座った。

ここは、少年が島で一番好きな場所だった。岩山からは、島中が見渡せると同時に、瀬戸内海の島々やもうすぐ新しい生活を始める対岸の街を眺めることができたからだ。だが、目玉を落とした少年には、今は何も見えない。

少年は見ようとする代わりに、耳を澄ました。海から離れた場所なのに波の音が聞こえる。白波が立っているのだろうか、ざわついている。

次に、少年は鼻で呼吸した。桜の花の息吹の匂いを感じた。この島は桜の名所としても有名だった。街からこの島を眺めると、青い海に、ピンクの花びらが浮いているように見えるとニュースで報道していた。でも、島の人には、景色の素晴らしさが近すぎて見えない、近すぎて感じない場所だった。

手で地面を触った。雑草が生えている。そこに一輪の花。少年は、花を手折ると、口に近付けた。ほのかに甘い味がした。ミツバチのように、空を自由に飛んでいる気分になった。

風が吹いてきた。どこか南の方から吹いてきたのか。暖かい。これまでの冬の冷たい風にちじみ込んでいた細胞が手



足を伸ばす。少年もひと回り成長する。目玉を無くした少年だが、世界の全てを体感していた。

## 四 目玉の旅立ち

少年の右目は海に転がり落ちると、西風を受けた潮流に乗り、東へと進み、右目が暮らしていた島よりも大きい島に上陸した。再び、海を渡り、広い河口に辿り着いた。河口から川を遡っていく。川なのに大きな船が行き交っている。遙か彼方に威風堂々とした大きな建物があつた。城だ。巨大な城だ。右目は、これまで、島から一番近い街にある櫓しか見たことがなかった。天守閣は初めて見た。

あそこに、登ってみよう。右目は城を目指し、川を遡る。途中、採石船や建設工事の材料を運ぶ船、遊覧船などに出会った。

ようやく城がある公園に到着した。右目は遊覧船の船着き場から上陸すると、砂利道や芝生を転がり、石の階段も、なんのその、と掛け声を上げて登り、城の入り口の前に立った。

でっかいなあ。今さらながら、城の大きさ、高さに驚いた。それよりも、その城に、何十人、何百人もの観光客等が入り、その横から出てくる様子に驚いた。こんなにもたくさんの人は島では絶対に見られない光景だ。

もし、島にこんなにも多くの人が訪れたら、沈没してしまうだろう。右目は慌てて、自分の足下を見る。大丈夫。地割れも陥没もない。よかった。安心した。島から見える街も賑やかだったが、城の観光だけにこんなにも多くの人が集まるなんて信じられなかった。右目は自分の立ち位置を確認すると、天守閣を目指し、観光客等に踏みつぶされないように城の中に転がり上っていった。

ひゃあ、すごいなあ。右目は島にいたころも、一番高いところから周囲を見渡すのが好きだった。島々が見え、海には行き交う船があり、波は穏やかで、空には鳥が飛んでいた。しかし、城の天守閣から見る景色もまた雄大だった。

天守閣よりも高いビルが、四方に建っている。ビルとビルの間にも、建物が隙間なく建ち並び、地面は見えない。建物は天守閣を中心にして、同心円状に遙か遠くまで広がっている。島では、遙か彼方に島や山が見えるけれど、この大都市では、遙か彼方もビルや家など建築物が立ち並んでいる。建物、建物、建物だ。

展示場でもないのに、道路には車が溢れて返っていた。車たちは、動きたいのか、それとも、その場所で留まっていたのか、どちらかわからないほど渋滞していた。

また、島の人口の何百、何千倍もの人が急ぎ足であらゆる方向に流れていた。彼ら、彼女たちの進む方向は、自分たちの考えではなく、都市の意思に踊らされているように見える。

一体、何人の人がこの街に住んでいるのだろう。それこそ、地面が沈んでしまわないかと心配にさえなる。いや、都会では、地面が沈むどころか、その地下を開発して、地下街や道路、地下鉄などに活用している。

右目は天守閣をひと回りして、大都市の風景を確認すると、再び、川に戻り、上流を目指して進み始めた。

少年の左目は、右目とは反対に風に逆らい、瀬戸内海を西へと向い、いくつかの島を渡っていった。見えるものは、これまで自分が見てきたものとは異なっていた。木や花や、動物たち、昆虫たち、すべてが初めてだった、左目は、そうした生き物たちと言葉は交わせないものの、アイコンタクトで意思を通い合わせた。

こんにちは、と黒いひとみを大きくすれば、こんにちわと、まばたきの返事があつた。さようなら、とひとみを閉じれば、さようなら、と相手も瞳を閉じた。一番南の島にやってきた。もうそこは、春は過ぎ、夏になっていた。季節が一つ早い。瞳から汗が噴き出た。左目は海に浮かぶヤシの実の中に潜り込むと、更に南に向かった。

少年は相変わらず、島の頂上の、自分専用の展望台にることが多かった。でも、暇ではなかった。不思議なことに、転がり落ちたはずの右目が見る全ての映像が、頭の中に飛び込んできた。初めて見る物もあつたし、テレビや雑誌、本で見たことがあるものあつた。

また、左目が見るもの全ての映像が、同じように、頭に中に映し出された。それも、テレビや雑誌で見る映像に比べ、息遣いが聞こえ、肌の凹凸が分かるくらい、身近に感じられた。

「へえ。こりゃ、面白いな」

少年は大きな岩の上に座って、飽きることなく顔を海に向けていた。

右目は大きな湖を横目で見ながら通り過ぎた。そして、昔、日本の国を二分する大きな戦いがあり、何万人もの人々が亡くなった戦いの地に着いた、そこは、今は、ただ、田んぼが広がっているのどかな風景で、矢折れ、刀つきたであろう武士たちの面影はなかった。ただ、夏草だけが生き茂っていた。その戦いの地に一礼して去った。

再び、天守閣のある大都市と大きさや広さでは変わらないほどの街を過ぎると、この国で一番高い山が見えてきた。春なのに、山の頂上では、雪を冠として頂いている。

その山を横目で見ながら進んだ。いくつかの峠からは、駅伝ランナーの荒い息と沿道の応援の人々のこだまする声が、誰もいないはずなのに聞こえてきた。声も地層のように堆積するのかも知れない。

そして、世界でも有数の、この国で一番大きな都市にやってきた。この都市を象徴するタワーが二つ見えた。タワー以外にも、高さでは負けず劣らずのビルが建っている。面白いことに、ビルたちはひとり立ちしているにも関わらず、十塔ほどが建ち並んでいる。その塔の塊が、お互いの縄張りを争っているかのように、広い大都市の中に数カ所点在している。右目がかつても好きなお城のようだ。現代のお城。その塔の下に、ビルや家など現代の城下町が広がっている。

右目はそれぞれの城を、城下町を確かめようと、すべての、高層ビル群をくまなく訪れ、現代の天守閣から、街を見渡した。どこかが中心で、どこも中心ではない、この大都市。ビルが全てを飲み込みながら、そのビルも他のビルと競い、共存している。右目が住んでいた島のおじいちゃんやおばあちゃんが、そのまま高層ビルに進化したような気がした。人々の命や意思も堆積するのかも知れない。

何日もかけて、右目は大都市を巡った。満員電車の中では、サラリーマンの皮靴やOLのパンプスに踏まれないように、隙間を縫うように転がった。そして、一通り転がると、この大都市に別れを告げた。

太平洋の波間に漂う左目は、海での生活を楽しんでいて、ヤシの実の下を、マグロの群れが泳いだり、トビウオが頭の上やすぐ側を飛び跳ねたりした。時には、サメに飲みこまれることもあったが、お尻から飛び出し、難を逃れた。また、親子連れのクジラに遭遇し、背中シャワーで、雲にまで届くほど空高く持ち上がることもあった。

その時だ。広がる水平線の彼方に、陸地が見えた。新大陸だ。そうだ、あそこに行こう。海での冒険も面白かったが、ただ、漂うだけでは、満足できなかった。自分の体で転がりたかった。風が吹いた。左目を乗せたヤシの実は、どんどんと陸地に近づいた。途中、嵐に巻き込まれるなど、危険にさらされることもあったが、ようやく新大陸に辿り着いた。

少年は、島にいながら、楽しいことも、危険な目にも会った。目が経験すること全てが少年の頭の中に起こったからだ。それでも、右目や左目と同じように、歯を食いしばり、耐え抜き、右目や左目がしたことなのに、自分がやったことのように嬉しかった。

右目や左目は自分の体の一部だから、右目や左目が成し遂げたことは、自分が成功したことと同じだ。それだからこそ、様々な経験をもたらしてくれる右目や左目に心からお礼を言った。

「ありがとう。右目に左目。これからもよろしく」

## 五 不毛の地と新大陸

右目は大都会を過ぎ去り、北上した。到着した場所には、鉄条網が張り巡らされていた。立ち入り禁止の場所だった。人が立ち入ることができなくても、眼球ならば転がり入ることが出来る。右目は立ち入り禁止先に行こうと決心した。この国の中に、人によって封鎖された場所があるのならば、是非とも、この目で確かめたかったからだ。

「いくぞ」

右目は自分にはっぱをかけるつもりで声を出した。突き進んで行くと、街が見えてきた。街には、電気店やスーパー、ガソリンスタンド、役場があり、住宅もあった。何一つ、他の街と同じだった。違っていたのが、人が誰一人としていないことだ。気配もなかった。車も走っていなかった。ゴーストタウン。それにしても、住居は新しかった。人が住まなくなって、まだ、そんなに時間が経過していないようだ。

右目は高台に登った。街をよく知るためには、高い場所から眺めるのが一番だからだ。丘の上から、海を見た。海岸沿いに、工場が見えた。いや、工場と言うよりも廃墟だった。

屋根が吹き飛ばされ、外壁も朽ち果てていた。その真ん中に、巨大な機械があった。街には人が住んでいないにも関わらず、その廃墟では人が動いていた。だが、普通の服装ではない。作業員全員が防護服を着用している。

右目は高台から防護服の人たちの作業をずっと眺めていた。ただし、それ以上近づくことはやめた。その作業が何を意味するのかはわからなかったが、作業する人々の安全と健康を心から願った。

左目の希望は適った。だが、新大陸に到着することが目的ではなかった。次に進んでいくことが目的だった。しかし、行き先の宛てはなかった。それなら、ただ、転がり続けよう。転がり続ければどうにかなるはずだ。

海岸に上陸し、岩山を抜け、砂漠や草原を越え、大きな湖を泳ぎ渡った。そして、左目がこれまで見たことがない摩天楼の群れが現れた。人間が住む巨大な基地だった。

一旦、この街に入り込んだら、二度とは出られないような気がした。街が複雑なためか、それとも街の魅力のせいなのか。それは、街に入ってみないとわからない。左目は勇気を振り絞って、摩天楼の中に飛び込んだ。

キー。急ブレーキの音。左目はあやうく車に跳ねられそうになった。その時「こっちよ」の声とともに、左目の肩口(?)が掴まれ、狭い路地に引っ張り込まれた。

「ここなら、安心よ。機械の馬が雄叫びを上げてまでは、追い掛けてこないわ」

声の先には、同じ眼球がいた。青く澄んだ瞳の持ち主だった。

「でも、危ないじゃないの。自殺でもするつもりなの？」

「いえ、そんなことはありません。とにかく、ありがとうございます」

左目は自分と同じような生き物、すなわち、眼球だけが意思を持っていることに驚いた。これまで、長い旅をしてきたけれど、自分と同じような眼球だけの生物には出会わなかったからだ。

でも、おかげで自分だけが特別な存在ではないと安心した。仲間がいることに素直に喜んだ。青い瞳の持ち主は、しゃべり方から判断すると女性のようなのだ。

「君はもともとここに住んでいるの？」

「そうよ。あなたは」

「僕はここから西の方向の、遙か彼方の島からやってきたんだ」

左目はもう一人の眼球に対して、自分が体験や冒険してきたことを舌が転がるぐらいにしゃべった。その間、青い瞳の彼女は黙って聞いてくれた。

「長旅で、今は疲れたでしょう。私たちの家にいらっしゃい」

「私たち？」

「そう、私たち」

彼女に連れられて、左目は細い路地から階段を上って行った。この街に来るまでも、高い山を越えてきたが、階段を上るのは苦手だった。ほぼ直角の角を登るのは、球体にとっては難しいからだ。

体液を付着させながら、なんとか一つ目の階段を上った。だが、見上げててもそこからは頂上が見えない。せめて、もう少し、傾斜が緩ければいいのと思う。それでも、彼女は何の苦もなく、この階段を上っている。負けられない。左目は彼女の後に続く。

「どこまで登るんですか？」

何十回目かの休憩の後、左目は彼女に尋ねた。

「もう少しよ」

彼女は青い瞳を一回閉じ、ウインクしてくれた。励ましてくれている。左目はこのまま登ろうと意思を強くした。

しばらく、直壁の登攀が続いたあと、かすかだが、青い空と白い雲の切れ端が見え出した。あんぱんやソフトクリーム、おまんじゅうにバナナなど、雲が形を変えていく。左目はお腹が空いていた。

「着いたわ」

彼女が振り返った。そこは、この建物の屋上だった。彼らは非常階段を登りつめ、頂上に到達したのだった。

屋上のテラスからは、街全体が見渡すことができた。この街は、南に海が広がり、北には山並があり、一本の大きな川が流れていた。川が運んできた砂や土で、広がった土地だ。そこに、人々が住み、家やビルなどが建てられていった。学校の先生が、社会の授業の時、よその土地に行ったときには、必ず、その土地の一番高い所に登って、その街全体を見渡しなさいと言ったことを思い出した。

島に住んでいた左目にとって、島の展望台が一番高い場所だった。そこからの景色は、周りを見渡せば、三百六十度、海で、島があちこちに浮かんでいた。北側には、何万トン級のタンカーが毎日のように通航していた。いつか、自分もあの船に乗って、世界中を巡りたいと願っていたが、今、こうして、他の街、しかも、世界の中心である摩天楼都市にいる。

左目が驚いたのは、この街の景色だけでない。この建物のテラスには、自分と彼女以外に、何十

、何百もの、目玉たちがいたからだ。この目玉たちは、北アメリカや南アメリカ、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリアなど、世界中の国からやって来ていた。また、若い目玉から年老いた目玉まで様々な年齢層だ。

学校の授業で世界地図を見たことがあったが、他の目玉たちは、授業で教えられた国からやってきていた。知識が血肉に変わる。

左目は屋上にいた全員と話をしたわけではない。目と目で挨拶をただけの者もいた。だけど、日本からやって来た左目にとっては、地図上ではなく、現実として、世界が広いことを実感した。

そして、この場所に世界中から目玉たちが集まっていることは、世界が広くかつ狭いことを意味していた。

「彼ら、彼女たちは何をしていますのですか？」

最初に出会って、この屋上まで導いてくれた青い瞳の、そう、この瞳の青さは自分が住んでいた瀬戸内海の青さに似ている、彼女に尋ねた。

「そうね、一日中、座って、瞑想している目玉たちもいるし、街をただじっと眺め続けている目玉たちもいるわ。また、ここから、地面に降りて、街の中を転がって、今日起きた出来事を仲間に知らせ、これから世界がどう転がり続けるのを予想、予測する目玉たちもいるわ。その話を聞いて、自分に何ができるんだらうと、できることから実行していく目玉たちいるわ。どちらにせよ、みんな、誰からの押しつけでもなく、自分の意志で動いているわ。それだけは、確実に言えるわね」

彼女の青い瞳の中に、赤い炎の意志が灯っているのが見えた。

「わかりました」

それから、左目は、何日間も、この屋上に滞在し、ある時は、瞑想し、ある時は、二十四時間、不眠不休で街を眺め、ある時は、あらゆる方向に進む人ごみや道路に溢れかえる車の渋滞の中を転がった。街の喧騒とエネルギーとを体全体で感じ、吸収した。一通り、この街で生活した左目は、青い瞳の彼女に別れを告げた。

「そう、行ってしまおうの」

「ええ。これまで、親切にしてくれてありがとう。僕には、まだ、行かなくてはならない場所があるんです」

「そう。それなら仕方がないわ。さようなら。元気でね」

「さようなら」

お互いの顔が何回となく閉じられ、その度ごとに、水のカーテンが下ろされた。

少年は、両目がないにもかかわらず、山上から海岸に降りようとした。右目や左目の行動は十分知っていた。彼らが見る出来事や人、物は、彼の頭の中に、テレビの画面のように映像が流れた。この島にいながら、世界中を旅している気分になった。だけど、それだけでは満足できなかった。じっとしていられなかった。

右目や左目が動くたびに、右手が、左手が、右足が、左足が動いた。少年は、知らない間に、海

岸まで降りて来ていた。もちろん、いくら住みなれた島だからとしても、見えないまま、この砂浜まで、無事にたどり着けたわけではなかった。

何回か、道に空いた穴に足を入れ転んだり、石につまずいたり、電信柱やゴミ置き場、家の軒先などにぶつかりながら、やっとの思いで砂浜に辿り着くことができた。その結果、掌や膝には、引っ掻き傷、頭にはたんこぶなどが刻まれた。それでも、こうして自分の力で、砂浜に来られたことが少年には嬉しかった。

名誉の勲章だ。少年は、そう呟き、体中の勲章を一つ一つ確認した。潮彩の音を聴きながら、遙か彼方の両目たちに思いを馳せた。心は身近に感じながら。

## 六 北の大地とジャングル

右目は、人が住んでいたのに、住めなくなった街を去り、更に北上した。北に行けばいくほど、寒かった。道がある限り、転がっていった。行き止まりになった。そこは、半島の先端だった。半島の先には、島が見えた。右目が住んでいた島と比較すれば、巨大な大陸に見えた。

「あの島に行ってみたい」

周囲を見回す。先端の丘から周囲を見渡すと、近くに列車が走っていた。列車は、北上していた。このままのスピードで走ると、目の前の島まで海を渡ってしまいそうな勢いだ、だけど、橋はない。列車が先端まで行くと姿が見えなくなった。海の中に落ちたのか。そんなまさか。

右目は列車の行き先を確かめるために、丘を降り、列車が消えた辺りに向かった。謎が解けた。列車はトンネルに入ったのだ。暗いトンネル。入り口から覗いても、出口は見えない。暗闇の粒子が蛍のように漂っている。

このトンネルは、向こうの島につながっているのだろうか。右目は戸惑った。遥か彼方から気笛が聞こえる、気笛がだんだんと近づいて来る。列車だ。列車がやってくる。どうする、あの列車に飛び乗るか、それとも、このまま、生まれた島に帰るのか。

考える暇はなかった。もう目の前を列車が通り過ぎようとしている。

ええい。右目は列車の車輪の隙間に飛び付いた。入った。体の中に入れる。車輪の空間に身を寄せ必死でしがみついた。列車の車輪は車輪の円周が見えないほどの勢いで回転している。もし落ちれば、死だ。列車が止まらなければ、降りることはできない。右目は必死の思いで、なれるものなら自分の体を車軸の一部にしようとした。

列車がトンネルの中に突入した、周囲が全て暗闇に覆われた。右目は何も見えなかった。ただし、ごおごおと耳をつんざくような音だけが聞えた。列車は間違いなく走っている。列車と一緒に、あの新天地に向かっているという思いだけが、右目の心を強くさせた。

「これは何だ」

左目は驚いた。左目は大都会に別れを告げ、大陸を南下し、熱帯の木が生い茂るジャングルに突き当たった。左目は松林や森を見たことがあったが、これほど奔放に、自由に枝や葉が生い茂っている植物を見るのは初めてだった。本当に、木や草が生きているという感じがした。

植物は地面から動かないけれど、枝は同じ木から分かれたのにも関わらず、互いに競うように伸び、葉は太陽を我が物にしようかと広げる。光を吸収するというよりも、光を食い尽くすかのようだ。

左目は、初の入り口で、生々しい勢いに圧倒された。だが、この目でジャングルを確かめたかった。足下に落ちていた葉に飛び乗ると、ジャングルを流れる川を遡っていった。

何だか、一寸法子の気分だ。鬼が出るか、蛇がでるか。宝物はどこだ。

最初は、おどけていた左目だったが、密林の奥に進むにつれて、空気を切り裂く獣の咆哮や突然に降り出す痛いほどの雨、川の下を泳ぐ、これまでも見たことがない巨大な魚などに遭遇する度に、不安になり、生きた心地がしなかった。



だが、今さら後には戻れない。突き進むだけだ。無理やりに自分を鼓舞し、木の葉をマーメイド号と名付け、更に、奥深く密林を突き進んだ。

少年は、小学校を卒業し、中学生になっていた。引き続き、少年は、瀬戸内海の小島にいらながらも、右目と左目から入ってくる情報のお陰で。世界と交信ができた。ただし、今住んでいる島の暮らしについては、知らないことが多かった。島にいらながら、自分だけが置いてきぼりをくっているような気がした。

列車がトンネルを抜けた。右目は暗闇の世界から解放された。右目の前には、平野が広がっていた。北の大地だ。

ここでは、自分が住んでいた島のように家と家との間に塀はなく、しかもひつついておらず、全てが開放的であった。広々とした草原や畑、その間に、人が生きていることを証明するかのよう、ぽつんぽつんと家があった。

また、道は終わりがなくどこまでも続き、今も、伸び続けているかのように思われた。遙か彼方には山々が見えた。広すぎる。でっかいどう。これが、右目の北の大地に対する第一印象だった。

列車は、広大な大地を縫うようにして走り、いくつかの街を抜けた。やがて、砂漠の中に突然現れたオアシスのように、その巨大な大地に建ち並ぶ高層のビルが見えてきた。

大きな駅に止まった。右目は飛び降りた。この街は、右目が旅してきた街に比べて、決して負けないくらいの大ささだった。人も大勢いるが、何故か、ゴミゴミとした雰囲気も慌ただしさもなかった。空気は乾燥し、気温は涼しかった。

右目は、しばらくこの街に住もうと思った。これまでは、街を見て回ろう、調べてやろう、という意気込みだったが、この街は、訪れた人をゆったりとさせる雰囲気があった。よそ者を排除するのではなく、訪れた人を全て受け入れてくれる懐の深さがあった。

「ここで、しばらく、暮らそう」

右目は、早速、仕事を探した。

左目はジャングルの更に奥地を突き進んだ。うっそうとした木々の葉がなくなると、空が見えた。その先に、巨大な宮殿があった。宮殿は多くの石が積み重ねられていた。見上げる。高い。石段の数を数える。いち、にい、さん、百、もう無理だ。途中であきらめた。数を数えるのが無理ならば、登って確かめるしかない。

左目は宮殿を登り始めた。石段は左目の背丈よりも高い。まともには登れない。ところどころ崩れかかっている場所を探しては、転がり登っていく。

「よいしょ。よいしょ」

駄目だ。風化しているのか、石が崩れる。元の場所にずれ落ちる。それでも、何回も昇ることに挑戦し続ける。やっと、ひとつの石段を登りきった。頂上を見上げる。まだまだ先だ。

いち、にい、さん、百。石段の数を数える。だが、数えると逆に、あまりの遠さに登るのをやめ

たくなる。左目は目の前のひとつの石段だけに意識を集中させた。ひとつずつ、ひとつずつ。うわ言のようにつぶやきながら、石段を登って行く。

「ふう。ひと休み」。左目は動きを止めた。再び、見上げた。遠い。まだ、まだだ。後ろを振り返る。高い。ここまで登って来たんだ。

宮殿の下にはジャングルが宮殿を包むように広がっている。そのジャングルの中心にいるのが宮殿だ。宮殿がジャングルを束ねているのだ。

「あそこだったかな」左目は自分の出発点を確認した。遥か彼方だ。やっとの思いで、ここまで来られた。少しの自負心。だが、見上げれば、ゴールの遠さに呆然とする。あきらめたくなる。だが、もう少しだ。

頂上に行けば何があるのか。何があるのかわからない。わからないのにお前は登るのか。登ってみたい。登って確かめたい。何もなければ労力が無駄に終わるぞ。無駄でもいい。頂上で確かめたいんだ。自問自答を繰り返す左目。

再び、登り始めた左目。時間を忘れ、ただひたすら目の前の石を登ることだけに集中した。

あとひとつ。あとひとつ。どれくらい時間がたったのだろう。

頂上までの石段は残りひとつだった。登りきる左目。「やったあ」やっとならに到達した。頂上は、何かの儀式をするのに最適な広さだった。

左目は、中央の祭壇と思われる場所に行った。そこから四方を見渡す。ジャングルがあり、遥か彼方に山並みや水平線が見えた。地球の中心がここにある。自分もここにいる。

日は落ちかけていた。空が赤い。夕日に染まる空。その下では漆黒の帳がいつ降りて来ようかと待ちかまえている。左目は、宮殿の頂上で夜を明かすことにした。闇の始まりと明の始まりをこの目で見たかったからだ。体で感じたかったからだ。

左目は暗闇のなかで、空から降り注ぐ星の光を浴びながら、今日までの苦勞と明日からの希望を感じながら眠りについた。

少年は高校受験に向けて、日夜、勉強していた。目が不自由なため、学校の授業は点字で習った。また、先生の授業を耳から聞いて、頭に叩きこんだ。自分の住んでいる場所は、鼻で匂い、耳で聞き、口で味わい、手の触感で確かめた。そして、いなくなった両眼で、世界を感じた。

## 七 南へそして極地へ

右目は街中を巡り、仕事を探した。右目には手足がないため、重い荷物などは運べない。だが、遙か彼方まで見渡せる視力はある。

この眼を生かせば何とかなるだろう。街の中で、求人募集の張り紙を見つけた。コンビニだ。空いた棚に商品を入れる、在庫管理はできないけれど、レジならできるはずだ。

ええい。何とかなる。右目は店に飛び込んだ。最初、店主は、目に何ができるんだ、仕事がちゃんとできるのか、それにどこのどいつかもわからん、と、右目を雇うことを渋ったが、レジにお客さんの行列ができ、あまりにも忙しかったので、とりあえず雇ってみるか。ダメだったらクビにしようと、軽い気持ちで承諾した。

「ありがとうございます」

右目は自分の視力をいかして、お客さんがレジに並ぶ前に、準備態勢に入る。お客さんの態度から、まだ商品を探したいのか、もうお金を支払いたいのかがわかったからだ。最初は、心配していた店主も、右目のお客さんのあしらいに感心した。

数ヶ月、コンビニで働いた右目は、今度は、別の仕事がしたくなった。コンビニでの仕事以外にも、飲食業やファッション関係の店舗、清掃や配達など多彩な仕事があり、様々な人が働いていた。右目は、この街を、もっと知りたかった。右目は店長に別れを告げた。

「残念だな。もし、他に仕事が見つからなければ、いつでも帰って来いよ」

自分よりも身長や体重が何千倍、何万倍もある店主から励まされた。

「これまで、大変お世話になりました」

頭を下げると、右目はコンビニを後にした。次の仕事は、住宅地図の確認だった。地図を体にぶら下げて、見上げても頂上が見えないようなオフィスビルから始まり、ゴキブリでも通らないような狭い路地まで、一日中、転がり回った。何日も、何日も続けた。おかげで、この街の全てを知ることができた。同じ一日にも関わらず、朝、昼、夜と時間とともに目まぐるしく変わりゆくこの街をもっと知りたい気になった。だが、反面、潮どきだとも感じた。

「これまで、ありがとうございました」

住宅地図の社長に礼を言うと、右目はこの街を出た。

左目は極地にいた。あのジャングルとは全く異なる気温・気候だった。あまりの冷たさに目の中の瞳までが凍ってしまいそうだった。でも、体の外が冷たければ冷たいほど、自分の体が温かく感じ、生きていることを強く意識した。

極地の基地隊員の助けを借りて、犬ぞりや雪上車に乗せてもらい、雪上を探検した。ペンギンと一緒にダンスをしたり、ペンギンの羽毛に隠れ、極地の海で海中水泳にも興じた。

一番の喜びは、探検隊員の協力の下、極地点に立つことができたことだった。

極地点と言っても、何もなただ広い氷原に、いくつかの国の旗が「わたしはここにいる」「わたしの存在はここよ」と言いたいように、屹立していた。

口を開くと、その隙間から寒気が流入し、胃や腸など、体の中の内臓が凍りつきそうだった。それでも、左目はバン

ザイの声を何度も上げた。自分も、旗と同じように、「ここにいること」を示したかったのだ。

少年は高校生になっていた。目が不自由なまま、島から船に乗り、街に着くとバスで学校に通学した。島でいた頃よりは、多くの知識を得て、多くの友人を得た。両目から入ってくる情報を友人たちに披露した。みんな、よく知っているなあ、よく勉強しているなあ、と感心してくれた

。

少年が特別に勉強している訳ではなかった。右目が見たこと、左目がみた事実をそのまましゃべっているだけだった。少年は、自分の両眼が世界を一周していることは、決して言わなかった。言っても、どうせ、誰も信じないことはわかっていたからだ。

## 八 平和と戦争

---

右目は北の大地の街を離れ、再び、南下した。あの、真っ暗なトンネルを、もう一度通過し、今度は、北上してきた海側と反対側の地を旅した。初めて見る反対側の海は、これまで右目が暮らしてきた島に比べて、暗かった。波も激しかった。あの波の底には右目の知らない世界が広がっていた。

左目は穴に隠れていた。身をひっそりと隠していた。いつ銃弾が飛んでくるかわからないからだ。左目の近くには多くの人が倒れていた。口から血を流す人、両手が吹き飛んでいる人、親子なのか、折り重なって倒れている人もいた。みんな、誰一人として動かなかった。もう、人ではないのだ。物なのだ。信号や横断歩道、照明灯、植栽など、街の風景の一部になってしまっていた。

「何故、何故なんだ」

左目は何度も呟いたが、誰も答えてくれなかった。左目は答えを探そうとして、この戦いの市街地を転がった。建物が破壊され、車が横転し、道路のアスファルトが溶けてめくり上がっていた。火が燃え盛っているビルも煙がくすぶっている居宅もあった。その隙間を左目は転がっていた。

「全てを見てやるぞ、全てを記憶するぞ」

手も足もない左目にとっては、見ることしかできなかった。だが、見ることから全てが始まると信じていた。見て、見て、見て、見まくった。

「あっ」目の前に戦車がいた。キャタピラのつなぎ目が見えた。

「ひかれる」

その瞬間、

「こっちよ」誰かが体を引っ張ってくれた。左目は穴の中に転がり落ちた。おかげで、キャタピラのえじき、街の風景の一部にならなくて済んだ。

暗くて湿った穴ぐらだった。左目がやっと通れるぐらいの広さだった。左目の前を、同じ眼球が「こっちよ。こっちよ」と案内してくれた。振り返った眼球の目の色は、金色だった。

左目は言われるがままに、金色の眼球の後を着いて行った。どれぐらい転がったのだろうか。真っ暗な通路が突然明るくなった。出口だ。そこを飛び出ると、広い原っぱだった。直ぐ側に多くのテントが立っていた。お年寄りから女性、子どもたちがいた。若い男もいたが、ほとんどが包帯を巻いていたり、杖をついていた。老人たちは、何をやるもの疲れたような顔をしていた。反対に、子どもたちは、土埃のする中で、笑いながら遊んでいた。生に満ち溢れていた。左目はその両方ともを見つめていた。

「さあ、着いたわ」

金色の眼球の声で、我に帰った左目は、眼球専用の小さなテントの中に入った、そこには、青や黄、赤など、様々な色の眼球たちがいた。それぞれが、テレビの画面に向かって凝視していた。

「ここはどこ？いや、さっきは、ありがとう」左目は命の恩人の金色の眼球に礼を言った。

「ここは難民キャンプよ。そして、あたしたちは、世界中からやって来た記者よ。ここにいる、この国の出来事を、惨状を世界にありのままに伝えているの」

彼ら、彼女らは、ただ単にテレビを見ているのではなかった。自分が見た映像を、情報発信しているのだ。

「あたしたちは、見たことをそのまま伝えるだけ。その見たことをどう考え、どう次の行動にできるのかは、見た人それぞれの自由よ。あたしたちは、それを伝えることが役目なの」

左目が先ほど考えていたことと同じだった。ただ、左目は自分のために、何かを見ようとした。金色目の記者たちは他人のために、何かを伝えようとしていた。

テントの中は慌ただしかった。多くの眼球が出たり、入ったりしてきた。その熱気に左目は圧倒されそうだった。だが、熱気を背中に受け前に進みたかった。自分には何ができるのだろうか。左目は考えた。何も出来ないのではないか。しかし、じっとしてはいられなかった。他の眼球記者のカバン持ちとして、荒廃という負の連鎖を続けるこの街の取材に同行した。

少年は、高校生活を充実させるために、部活動に入部した。放送部だった。昼の休憩時間、少年は、同級生たちからの音楽を流しながら、これまで、右目や左目が見てきたことをDJのようにしゃべった。大都市のこと、ジャングルのこと、放射能が漏れ、立ち入り禁止の場所があること、極地のペンギンのこと、いまだに戦争が続いている国があること、などだ。

教師や同級生たちは驚いた。目が不自由な少年が、まるで、見てきたことのように、この国のこと、この世界のことをしゃべるからだ。少年の情報収集能力がすごいのか、少年の創作能力がすごいのか、多分、両方だろう。

同級生たちは、少年に畏敬の念を持った。だが、少年は、右目や左目が見てきたことを、ただありのままにしゃべっただけであった。

右目は船に飛び乗り、海に出た。これまでは、地面を転がったり、列車に乗ったりしてきたが、一度、今、自分がいるところを外から見たかったからだ。海は、自分が住んでいた瀬戸内海よりも、大きく、広かった。遥か彼方を見渡しても、島影ひとつ見えず、ただ、弧を描く水平線が見えるだけであった。

どうせならば、あの水平線の彼方に行きたかった。船は海岸線と水平線の間を通過して、南下していった。水平線の曲がりを見る度に、右目は地球が丸いことを知った。また、自分も丸い。つまり、この星こそが目玉なんだと知った。

じゃあ、この地球と言う目玉は、宇宙の何を見ているのだろうか。それと、この地球が右目ならば、もうひとつの目である左目の地球は、あの宇宙の彼方にどこかにいるのだろうか。その左目の地球は、この右目の地球を見つめて、何を思って、何を感じているのだろうか。

星空を見つめながら、右目は、ふと、少年や左目のことが気になった。何年も会っていないな。みんな、元気にしているのだろうか。

右目は、少年から転がり落ち、この国を旅して来た。あまりにも新鮮で刺激的な出来事ばかりに

出会い、経験してきたので、自分のことで精一杯で、少年や左目のことを思いやる余裕がなかった。

どうしているんだろう。会いたいな。右目は瞳を閉じ、眠りについた。

左目は戦場を駆け巡っていた。生きているのか、死んでいるのか、分からないスピードで時間が過ぎていく。取材が終わる、へとへとになってベッドに倒れ込む。そんな毎日が続く。

目を瞑っても、爆破されたビルやその埋もれたビルから突き出された手や足のかげらが映し出され、深い記憶の中に刻み込まれた。この街では、一秒で数十年が経過するのだ。そして、その数十年の記憶も一瞬で消え去るのだ。

ある日の体育の授業の時だ。

「痛い」少年は、ないはずの左目付近に痛みを生じた。少年はそのまま蹲った。

「どうしたんだ」

「大丈夫か」

教師や友人たちが駆け寄ってきた。

「なんでもありません。大丈夫です」

少年は起きあがろうとしたが、言葉とは裏腹に立ち上がることはできず、再び、崩れた。そのまま友人たちに抱きかかえられ、少年は保健室のベッドに横たわった。

右目を乗せた船は、南下していた。右目はふと体に違和感を生じた。自分の体なのに自分の体以外の場所の調子が悪くなった。

ひよっとしたら、少年や左目に何かがあったのかもしれない。このまま、船には乗ったままではいけない。ちょうど、船が港に着いた。船からは、様々な物資が下ろされた。右目もこの荷物と一緒に陸に降りた。どこかで休みたかった。ふと、温泉のマークを見つけた。

「少し、温泉で休もう」右目は温泉に向かった。

左目は、病院のベッドで横たわっていた。目の前は真っ暗だった。目に包帯が巻かれていた。

「ここはどこ？」左目が声を発した。

「気がついた？病院よ。まだ、痛む？」左目には見えなかったけれど、声の主は、金色の眼球だった。

「ええ、少し。僕は、どうしてここにいるんですか？」

「覚えていないの？」

「記者と一緒に、内乱の取材に同行していたら、急に目の前が真っ暗になったことまでは覚えてます」

「そう。あなたは銃で撃たれたのよ。でも、先生に尋ねると、かすり傷程度だから、目には異常はないそうよ。傷が治れば、ちゃんと見えるようになるって」

「ずっと、看病してくれていたんですか」

「そうよ。この街で、最初に、あなたを助けたのは私だから。あなたがこの街でいる間は、わたしがあなたの保護者よ」

金色の眼球の笑う声がした。左目も笑った。保護者という言葉がありがたかった。

左目は、暫く入院し治療をしていると、包帯がとれた。目に異常はなかった。これまでどおり、見えた。いや、これまで以上に、周囲の自分に対する思いやりが見えた。だが、いつまでもここにいるわけにはいかない。左目には左目の使命がある。

「さようなら」左目は金色の眼球に別れを告げると、北に向かって、再び、転がり始めた。金色の眼球は、左目の後ろ姿を、見えなくなるまで見送った。

少年は高校を卒業した。自分で生活する必要があった。仕事を求めた。ただ、島の仕事は、漁業が中心で、目が不自由な少年には、漁師は向いていなかった。

この島は、夏場には海水浴場が開き、街から多くの人が涼を求めてやってきた。少年は、島の観光協会で働くことにした。目が不自由だけど、生まれてからずっとこの島に住んでいるので、島の事はほとんど把握していた。浜辺の掃除やジュースの販売などの仕事のほか、観光客等に島の歴史や文化についても説明した。

少年は寂しくなかった。両眼から、毎日のように、日本や世界の情報が送られてくるからだ。また、両眼と会話はしていなかったが、情報を通じて、心が通い合っている気持ちになった。。

昼休みには、潮の匂いを嗅ぎ分け、砂浜に立ち、見えない両眼の存在を確認するのであった。



## 九 異なる文化

右目の体調は戻った。何をするわけでもなく、ただ、温泉に浸かっているだけであった。それでも、日一日と気分はすっきりしてきた。多分、少年や左目の体調が戻って来ているんだろう。こういう時は、無理をせずに、じっとしているほうがいい。でも、あまり温泉に浸かり過ぎると、体がふやけてしまいそうだ。それに、気力がなくなってしまう。右目はじっとしてられない性格だったからだ。

左目は石の街にいた。道路も建物も全てが堅牢な石で造られた街だった。左目が住んでいた島は、木や花など、植物と共存していた。道路は舗装されていず、土のまま、両端には島の人が植えた花が咲いていた。家々は木でできていた。漁業をする船も木で出来ていた。木の文化で構成されていた。

だけど、ここは違う、石の文化の街だ。石の上を転がる左目。通りには、カフェがあり、人々がゆったりと佇んでいる。大きな門があり、塔も見えた。ジャングルで見たのとは異なる巨大な宮殿があった。ダンスを踊っている人、絵を描いている人、歌を歌っている人、パントマイムをしている人など、様々な人々が街で遊び、街で親しみ、街に集っていた。

左目は、カフェで椅子に座ったまま本を読んでいるおじいさんに尋ねた。

「何をしていますか？」

おじいさんは答えた。

「人生を謳歌しているのさ」

左はこの街に暫くの間、住んでみようと思った。

右目は街を転がっていた。街を散策、探検するためだ。商店街の台座の上に仲間がいた。目玉だ。右目は嬉しくなって、台座に飛び乗った。

「やあ、元気かい」だけど、仲間は何も答えなかった。台の上の目玉は、よく見ると、銅像だった。右目は、仲間と話せなかったことは残念だったが、目玉が銅像になっていることに驚いた。

この目玉は一体、何をしたのだろうか。右目が知っている限りにおいては、銅像になる人は何かしらの功績を残した人だ。

右目が台の上からこの街を見渡すと、あちらこちらに銅像があった。それも、人間じゃない。ねずみや猫、おじいさん、おばあさん、それに壁や反物などの形をした妖怪だった。

右目はまさかと思い、街中を転がった。銅像全てが妖怪だった。大勢の観光客たちが、その妖怪と一緒に写真を撮影したり、銅像を撫でたりするなど、楽しんでいた。

人間と妖怪の和解？それとも、元々、妖怪は人間だったことへの理解？いや、今は人間が妖怪になっていること？への郷愁なのか。

右目がこの街をうろついていると

「おい、お前、どこから来た？」と声が掛った。

辺りを見回す。

「ここだ、ここだ」マンホールの蓋が少し開いていた。そこには、何か光る物が右目を見つめていた。右目はマンホールの中に入った。そこには、さっき、銅像で見た、おじいさんやおばあさん、ねずみや猫などの妖怪たちがいた。

妖怪たちの話では、ボランティアで、銅像に取り憑いているそうだ。

「銅像があるのに、何故、わざわざ取り憑いているんですか」

右目が尋ねると、

「心だよ、心。銅像だけだと、形だけだろ。やっぱり、心がないと、迫力がないんだよ。本物になれないんだ」

右目と同じ目玉のおやじが解説してくれた。

「そんなものですか」

「そんなものだよ」

「でも、時代は変わったよな。わたしたち妖怪が人間のために手伝ってやっているんだから」

泣き顔のじいちゃんが呟く。

「あたしたちだって、ここに住んでいるんだ。たくさんの人間が来て、住んでいる場所が有名になればうれしいじゃないか」

口をへの字にした強面のばあちゃんが断言する。

「そうよ、ばあちゃんの言うとおりのよ。これからは、妖怪と人間が一緒になって、街づくり、街おこしに努めればいいのよ」

猫顔の娘が後に続いた。

「それなら、おいらにだって分け前をくれよ。人間ばかり儲けて、ずるいじゃないか」

ねずみ顔の男が立ち上がる。

「ほら、お前はいつもそうだ。妖怪何だから、もう少し威厳を持てよ」

「威厳だけじゃ、腹が減る」

「銅像の前にお供えをしてくれているだろう」

「俺の銅像にはお供えが少ないんだ」

「人気の差ね」

「ほっといてくれ」

ねずみ顔の男は怒って、仕事、仕事と呟くと、マンホールから出ていった。

「わしは、お供えはいらんから仕事はしとうない」

泣き顔のおじいさんは柱に抱きつくとなん、えええんと、泣き顔をより一層泣き崩した。

「こらこら、泣いてばかりじゃいかんじやろ」

おばあさんが懐から砂を出すと、泣いているおじいさんの前で、お城を作ってやった。

おじいさんは砂のお城の前に座ると、トンネルを掘るなど、砂遊びに夢中になった。右目は、しばらくの間、この妖怪たちと一緒に、銅像に取り憑くボランティアに参加することにした。

左目は石の街で生活していた。ここにも、世界中から数多くの目玉が集まっていた。以前の摩天

楼の大都市にも目玉たちが集まっていたが、ここの目玉たちは少し雰囲気異なっていた。哲学の話をしたり、歌を歌ったり、絵を書いたり、小説を書いたりしていた。

周囲の仲間に触発され、左目も詩を口にしたり、演劇活動に参加したりなど、芸術家の真似ごとに打ち込み、時間が過ぎるのを忘れるほどであった。

少年は青年となっていた。目が不自由だけど、仕事は一生懸命に励んでいた。特に、夏になると、島の海水浴場には、多くのお客さんが訪れ、忙しい毎日を過ごした。また、右目や左目から送られてくる妖怪との交流や石の社会での芸術活動の情報に刺激を受けた。俺も負けていられない。

## 十 帰郷

---

右目は妖怪と人間の共存する街に別れを告げ、再び、船に乗った。船は南の海に出た。海には多くの小島が点在していた。島伝いに、更に、南に下る。右目が訪れた島の人々は、みんな、陽気で親切だった。

太鼓や笛の演奏の下、道路や広場など、島の至る所で踊り、果物や島の郷土料理でもてなすなど、右目の来訪を歓迎してくれた。右目が来たことをきっかけとして、自分たちの生活をより楽しもうとしていた。右目もまた、生きることを楽しもうとした。

ある日、島中の人々が、集まりだした。

「どこに行くんですか？」

「ロケットの発射だよ」

「ロケットですか？」

「そうじゃ。人工衛星を載せたロケットが発射されるんじゃ。この島はロケットの島としても有名なんじゃ。あんたも見に行くか」

「もちろんです」

右目は少年の体の中にいたときに、星座やロケット、人工衛星などの科学図鑑を読んだときがあったが、実物を見るのは初めてだった。

島の人々と一緒に、ロケットの発射台に向かった。山が切り開かれ、広大な敷地の真ん中に、ロケットが立っていた。右目はロケットの姿を見ると圧倒されるとともに、乗ってみたいと気持ちが沸き起こってきた。ロケットに燃料が注入され、出発までの最後の点検に入っていた。

「おい、お前、どこへ行くんだ」島の人々の声が後ろから声を掛ける。その声を無視して、右目は転がり、ロケットの発射台の最上階まで登っていた。

ロケットは発射に備え、ドアが閉められようとしていた。右目は、満員電車のドアが閉まるのと同じくらいの軽い気持ちで飛び乗った。

「あいつ、ロケットの中にはいったぞ」

右目の行動を見ていた島の人々が驚きの声を上げた。

発射を見守る島の人々。ロケットは十、九、八と発射まで秒読みの段階に入った。右目はロケットの自動操縦室の中でロケットが打ち上がるのをじっと待っていた。

左目は喧噪の中にいた。世界中の眼球が街に集まっていた。街では、眼球たちによるオリンピックが開催されていた。陸上、水泳、サッカー、バレーボールなど、様々な競技だ。

この日のために、何年間も練習を積み重ねてきた眼球アスリートたちが、己の力を信じて、競技に打ち込んでいた。また、そのアスリートの一瞬の成果を見ようと、多くの眼球たちが応援していた。

左目も競技場で百メートル走を見た。すごい勢いで眼球たちが転がっていく。あんなに早く転がると、目が回ってしまわないのかと心配してしまう。だが、見ているうちに、心配が興奮に変わっていく。

「やったあ。世界新記録だ」アスリートたちがゴールした瞬間、左目は自分のことのように喜んだ。

左目は、観戦した後、興奮も冷めやらないうちに、試しに自分も早く転がってみた。あっという間に、地面が近づき、遠のいて行く。目が回らないようにするためには、自分の回転よりも先に、視線を動かすことが必要だ。何だか、自分の可能性が広がったような気がした。

ふと、周囲を見渡すと、左目と同じように、道路を早く転がっている眼球たちがいた。にわかアスリートだ。飛び跳ねている者もいる。多分、体操競技を見終わったばかりなのだろう。

笑った。それでも、自分で自分の体を動かすことの面白さと難しさを知った。まだまだ、見なければならない、やってみなければならないことがある。左目はそう決意した。

少年は、いくつか星霜を重ね、青年を過ぎ、中年、老年となっていた。ある日、何十回目かの海開きを迎えた。太陽は高度を増し、光の角度が鋭角になると同時に、光の粒子の密度が濃くなった。容赦なく老年となった少年の肌を照りつける光。少年の影が乗り移ったかのように、少年の皮膚も黒身と皺を増した。

島から出ることはなかったものの、右目や左目のおかげで、少年は世界中やこの国中を見聞することができた。これまでも、眼球たちのオリンピックや宇宙旅行など、自分だったらできないようなことまでも、体験できた。

ある日、目を覚ますと、島の景色を感じた。少年が住んでいる島だ。灯台もある。港もある。島の段々畑もある。島の頂上の展望台も見えた。

「そうか。帰って来たんだ」

少年は海水浴場の砂浜に出た。少年の頭の中に老人の姿が写っていた。

「わしの姿か」

これまで、右目や左目のお陰で、世界中を見てきたが、自分の姿は見たことがなかった。目玉を落とした時の少年の姿しか覚えていなかった。

偶然にも、二つの方向から自分が見えた。右側と左側から老人が写っている。やがて、二つの老人の姿がひとつに重なった。

「お帰り」

老人は、少しふやけた右目と左目を拾うと、くぼんだ眼窩に入れた。

という話じゃ。

目玉じいさんは話し終わるとにやっと笑った。あたりはすっかり暗くなっていた。

「さて、洞窟も締める時間じゃ。入り口の鍵を閉めて、帰ろうか」

立ち上がって、ゆっくりと洞窟に向かう目玉じいさんに、藤島は質問した。

「それ以来、右目と左目は、旅には出ていないんですか？」

藤島は冗談のつもりで尋ねた。

「いや、ときどき、わしに黙って、勝手に飛び出しているみたいじゃ。何しろ、この島は、海賊伝説の島じゃからな。右目も左目も、その血を引いているかも知れん。ほら、こんなふうにな」

目玉じいさんは、右目と左目をぽこっりと取り出した。